

金 融 市 場 動 向 （平成 4 年12月）

1. 短期金融市場

12月中のオーバーナイト・レート（無担コール）、ターム物レートは、概ね横ばい圏内で推移した。この間、ユーロ円金利先物（金利ベース）も、総じて安定的に推移した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は44兆9,304億円と前月（43兆5,045億円）を上回った。

2. 資本市場

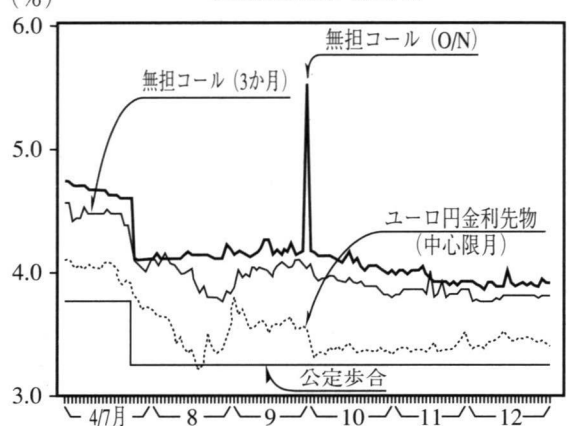
12月の国債利回り（145回債）は、月央以降低下し、結局4.515%（前月末4.650%）と指標銘柄としては63年12月9日（4.460%）以来の低水準で越年した（国債先物中心限月4.766%＜前月末4.914%＞）。

国債の出来高をみると、現物（店頭取引）、先物ともに前月を下回った。

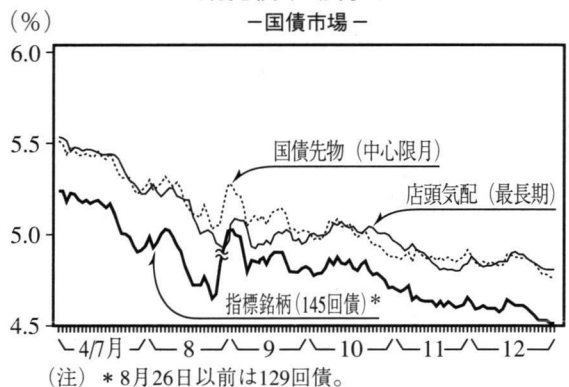
株式市況（日経平均株価）は、上・中旬中、新規手がかり材料難から小動きの展開となったのち、下旬入り後は軟調に推移し、結局16,924円（前月末比△759円）で越年した。この間、株式出来高（東証第1部月中1営業日平均）は、2.27億株と前月（2.28億株）並みの水準で推移した。

起債動向をみると、短期国債は、総じて落

短期金融市場金利



既発債市場利回り



株式市場



着いた入札結果となった（12月4日入札分＜6か月もの＞：募入平均利回り3.406%、応募倍率1.95倍）。

国内公募事業債の発行は、大型債の発行が相次いだこと等から、前月比大幅増加となった（11月1,550億円→12月3,190億円）。

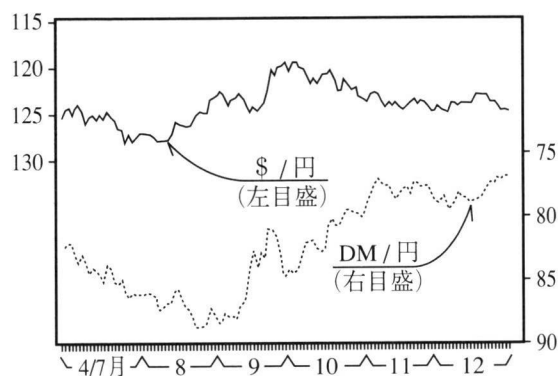
国内エクイティ市場での発行（12月払込み分）は、前月を上回った（11月500億円→12月965億円）。

3. 外国為替市場

12月の円相場（対米ドル直物相場、終値）は、新規材料難から月中を通じて124円前後で推移し、結局124.65円で越年した（前月末124.75円）。一方、円の対マルク相場（ニューヨーク市場、終値）は、下旬以降独金利低下の思惑等を背景に上昇し、結局77.08円で越年した（前月末78.41円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は123.0億ドルと、前月（130.4億ドル）を下回った。

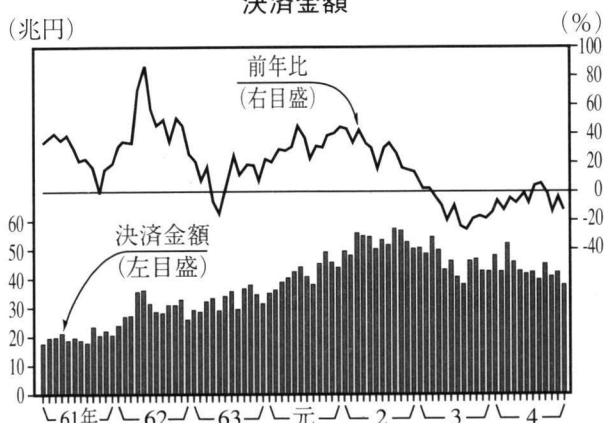
外国為替市場



4. 決 済

12月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、日本銀行当座預金受払額は前年を上回った（日本銀行当座預金受払：前年比＋8.3%）が、手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高はそれぞれ前年を下回った（手形交換：前年比△17.2%、全銀システム：同△10.6%、外為円決済：同△7.9%）。また、国債の決済金額（1営業日平均、移転登録および振込口座振替）は、

決済金額



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

前年に比べて、移転登録は減少した一方、振込口座振替は増加した（移転登録：前年比△3.7%、振込口座振替：同+59.6%）。

5. 資金需給、金融調節

12月の資金需給をみると、銀行券要因が5兆1,733億円の不足（前年同7兆4,334億円）となった一方、財政等要因は、国債利払いや特会その他の支払い等がみられたものの、法人税を中心とする税揚げが多額に上ったため、2,693億円の不足（前年同3兆2,358億円）となり、全体では5兆4,426億円の不足（前年同10兆6,692億円）となった。

こうした状況下、日本銀行はF B買戻し等により資金を供給した。

1月の資金需給（国債発行繰込み前）をうかがうと、銀行券要因については、12月支給の冬季ボーナス資金や年末決済用資金の還流が見込まれることから6兆円程度の余剰（前年同6兆5,935億円）となる一方、財政等要因については、国債償還、国債利払い等が見込まれるものの、冬季ボーナス等に係る源泉所得税を中心とする税揚げや厚生保険料の受入れがかさむことから、2,300億円程度の不足（前年同4,721億円）となる見通し。この結果、全体では5兆7,700億円程度の資金余剰（前年同6兆1,214億円）と予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

11月のM₂+C D平残前年比伸び率は△0.5%と前月比0.1%ポイント減少幅が縮小した。これは、貸出の伸び率はわずかながら低下したものの、財政要因（運用部の支払増など）等がマネー押上げに働いたことによるもの。通貨種類別にみると、C Dの伸び率は低下した一方、準通貨は小口MMCの増加等により減少幅が縮小した。

また、広義流動性の平残前年比伸び率は+2.6%と前月比0.1%ポイント低下した。

12月の銀行券平残前年比は+2.0%と前月を下回った。

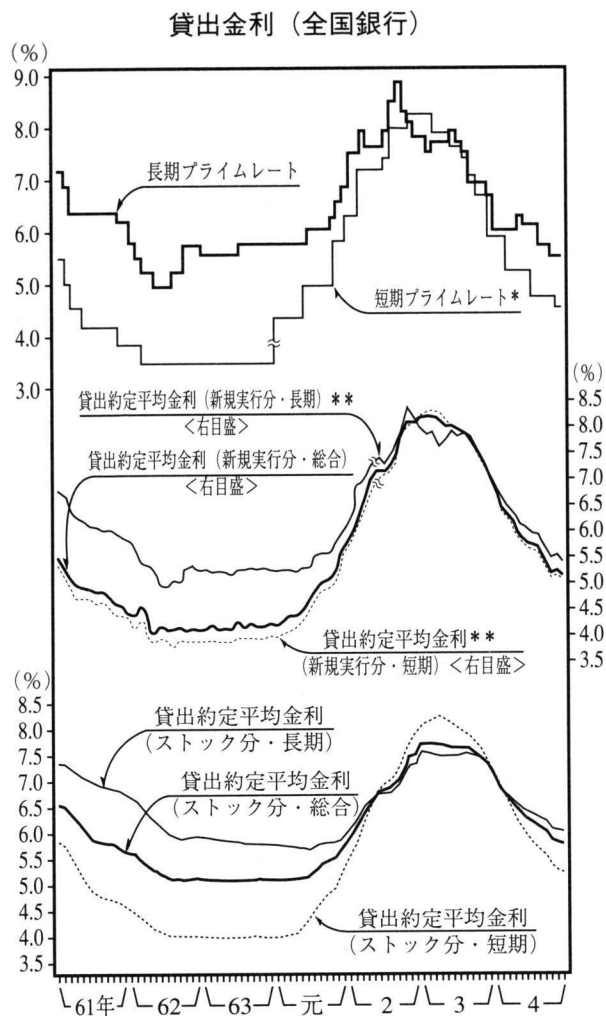
12月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+C D、都銀、地銀、地銀Ⅱ）は、前年比△1.1%と6か月連続の前年割れとなった。また、貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）は、前年比+2.0%と前月同様既往最低の伸びにとどまった。

7. 貸出・預金金利

11月中の貸出約定平均金利（新規実行分、全国銀行）をみると、短期金融市場金利の低下や、長期プライムレートの引下げ（△0.2%）等から、短期金利、長期金利ともに再び低下に転じ（短

期：前月比 $\Delta 0.095\%$ 、長期：同 $\Delta 0.093\%$ ）、総合でも前月比低下した（10月 5.241% →11月 5.136% ）。この結果、貸出約定平均金利（ストック分、全国銀行）でも、短期（同 $\Delta 0.055\%$ ）、長期（同 $\Delta 0.028\%$ ）とも低下し、総合も前月比小幅低下となった（10月 5.792% →11月 5.757% ）。

この間、11月の自由金利定期預金金利（3か月以上6か月未満の都銀平均受入金利）は、前月比低下した（10月 3.404% →11月 3.346% ）。



(注) * 元年1月以降は都市銀行の中で最も多くの数の銀行が採用した金利。

** 2年4月以降は地方銀行IIを含む。

(平成5年1月13日、調査統計局)